
ぼーかろいど ぱにっく！！

A r c

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼーかろいぢ ぱにっく!!

【著者名】

N4361N

【作者名】

Arc

【あらすじ】

歌を歌う為に生まれた存在、VOCALOID。

明確な設定など身長や体重くらいしかないその存在に本来キャラクター性は存在しない。ましてや人格など。

「そう考えていた時期が……僕にもありました……」

めーちゃんは呑んだくれ？兄さんは不憫な子？こんなミクは俺のミクじゃない？双子は仲良し？ルカ姉は清楚？
そんな論争は幻想だ！

「戦争なんて下らねえ！俺の詩を聞きやがれ——————つづ——————！」

！」

という勢いのみのおバカ小説短編集！

集え、ボカラ達の下らない日常を見てニコニコしたい人！

更新不定期！作者のやる気次第！

なんでも良いからまずは読んでみよう！ツマンなかつたらコメントをツマンネで埋め尽くしてくれ！そう盛大に！

【シップーティム】ネチャロボー（前編）

KAITO

「向々……今回の仕事せっしゃー」「ハントン」

ミク

「二つまでもせる気が保つさうじょうねえ

シニアコンの雰囲気を重視して、今回は地の文無し、会話前のキャラクタありです。小説の雰囲気をぶつ壊してあるので苦手な方はご遠慮ください。

【シリーント】ネギドロボー

KAITO

「……まつたぐ。

「これで何度もだと思つてゐるの?」

ミク

「だつて……」

KAITO

「だつて、じやな」。

最近近所さんから白い皿で見られてるの知つてるでしょ?
いい加減に止めなよ。

ネギドロボー

ミク

「泥棒じゃないもん!」

ちやんと盗つてもいによつて言われてから盗つてるんだもん!」

KAITO

「その話も聞き飽きたよ。

どうせまた『わやーー・ネギの声が聞こえやーー』とか言つてたんだ
う?.

それから漢字がおかしいよ、絶対自覚あるんでしょ」

ミク

「兄さんモノマネ下手なんだね。

私きやーとか言わないし」

KAITO

「そこは違うでも良いのー
とにかくー！」

もうネギは盗みちゃ 駄目ー！」

ミク

「えーっ、でもちょっとだけならバレないよー」

KAITO

「ちょっとなら良一とかいう問題じゃないのー。」

ミク

「五本くらこなら……」

KAITO

「駄目ですー！」

ミク

「せめて三本……」

KAITO

「駄目に決まってるでしょー。」

ミク

「いや一本ならオッケーでしょ？
絶対オッケーだよ間違いないー。」

KAITO

「どうからくるのその自信ー？

全部駄目ー！」

五本も三本も一本もとにかく駄目なものは駄目…」

ミク

「ここのエゴイスト…！」

ナルシスト！

変態…！」

KAITO

「逆切れ…？」

最後の方絶対只の悪口でしょ…？」

ミク

「あ、バレた？」

KAITO

「バレるよ…

モロバレだよ…！」

ミク

「だから五本くらいならバレないってー」

KAITO

「話戻つてるよ…

とにかく駄目です…！」

今日謝りに行つた農家のおじさんおばさんにキツーく言われました！

今後一切ネギ畠の半径一キロ以内に近付かない事…」

ミク

「有効範囲広つ…！」

それだとネギのにおいすら嗅げないよ…」

せめて五百メートルぐらいこなしてよー。」

KAITO

「どんだけネギが恋しいの！？」

あと五百メートル圏内だつたらにおいが判別できるのかミクはー。」

ミク

「万能ネギと長ネギと玉ネギを嗅ぎ分けられる自信あるねー。私が持つてる一〇八つの特技の内の一つよー。」

KAITO

「何の役にも立たない特技だよそれ！」

あと一〇八つって絶対ハツタリだらいくらいなんでも多過ぎやわー。」

ミク

「あ、ムーンウォークは得意中の得意だよー。」

KAITO

「誰も聞いてないしー！」

ミク

「なんせセンターボーン動かすだけで良いからね」

KAITO

「MikuMikuDanceの話だよねそれ！」

確かに足動いてないけどそこまで簡単じゃないからねー！

原作者の方こんな下らないネタで使ってごめんね！

……そんな話してるんじゃないの。

まったく、なんでそんなにネギが欲しいの？
よりもよつて盗みだなんて。

理解に苦しむね

ミク

「むっ！」

じゅあ兄さんばじゅうなのセー。」

KAITO

「えつ、僕？」

ミク

「田の前にアイスが転がってたら食べるのが兄さんでしょー。」

KAITO

「どういう偏見だよそれ！
僕何キャラなの！？
食べません！」

ミク

「なん…………だと…………」

KAITO

「ビックリマーク多過ぎだろー。
若干『バキ』っぽいよー。」

原作者の方にこんな下らないネタで使つて「めんねー。」

ミク

「大事な事なので一度言いました。
……もうへ、分かったよー。」

今度からはスーパーで買ってくるからそー

KAITO

「大丈夫?

あんまり高いからって、まさか今度はスーパーから盗つてくれるなんて事しないだろ?」

MIKU 「大丈夫、ちゃんとネギつてくるよ! ネギだけにね!~」

KAITO

「いい加減にしなさい!

どうせ

KAITO & MIKU

「ありがと!」
「ました!」

【KANTO × MENKO】物の存在を確かめる、だけど【前編】（前書き）

カイメイ注意。

今回は普通の小説風味です。

【KANTO × MENKO】君の存在を確かめる、だけど【前編】

めーちゃんが倒れた。

原因はハツキリしている。

「う、うーん……気持ち悪い……」

酒酔いだ。

それもかなり深い。

もう何度も田になるかも分からない。

とにかくうどぞりつするくらいの回数、頻度で彼女はこんな状態に陥っている。

「……まったく。

これで何度も田だと思つてゐるの?」

僕は濡れタオルやら飲み水やら色々看護に必要なものを揃えてリビングにあるソファまでやってくる。

呆れ顔の僕を見つけて、それまで辛辣な表情を浮かべていたためーちゃんの顔が明るくなる。

……何のつもりなんだろう。

「えへへ～。

何度もだっけ～？」

僕は持ってきたコップを差し出す。

めーちゃんは少しだけ体を起こしてそれを受け取ると、ほんの僅かに口をつける。

するとめーちゃんはまだ酔いが抜けきらないのだろう、ゆらゆらとした目で僕の顔を見た。

何故かめーちゃんは僕に微笑みかけている。

……なんていうか、何のつもりなんだろう。

「その度に介抱してくれるの、ＫＡＩＴＯだもんね。
いつもありがとうございます？」

……ああ、そういう事か。

それにしても、やっぱりとこつか、……めーちゃんのこの笑顔はちょっとどざるい。

そして心の何処かでこいつなる事を予想していて、予想通りの反応が返ってきた事に喜んでいる自分が居る。

なんか悔しいな。

悔しいのは悔しいのに、この笑顔を見せられたら僕はもう何も言えない。

「……はあ。

次は僕の苦労も考えて呑んでよね

濡れタオルをめーちゃんの額に乗せてやると、彼女は嬉しそうにそれを受け取る。

ペチペチと濡れタオルを叩いて涼をとるめーちゃん。
僕の言葉にトゲを感じたのか、彼女はあまりこれつの回らない口で僕に管を巻いてくる。

「だつて~。

ハクと一緒に飲んでももう楽しくつかわ~。

楽しい事は良い事よ?

あんたも少しくらい『ひつじ』に来なさ~よ~

こつむ、といつのま今彼女の状態に僕もなれとこつ事なのだらつ。当然お断りだ。

お酒は嫌いじゃないけど、めーちゃんを見る限りどう考えても好きになれる代物ではない。

アイスの方が好きだ。

「やつぱり一緒に飲んでたんだ……。

やつぱり変なメールが来たかと思つたらやつこつ事か……

なんかやたらにやーにやー言つてゐるメールだった。

後からそのメールを見返して悶絶するハクさんの姿が目に浮かぶよ

うだ。

「楽しいでしょ、ハクと話してると?
だからお酒もどんどん進むのよ~。
ね?」

ね?じゃないよ、まつたく。
それにしてもハクさんもハクさんだ。
弱いの分かつてるんだからあまり呑まない方が良いのに。
めーちゃんが呑ませたんだとしたら、それはもう犯罪といつていい
レベルかもしねり。

「……ねえKAITO。

知ってるかしら?」

めーちゃんは唐突に切り出してきた。

彼女は一体何を知つているというのだろう。
その意図が理解できない僕は何も答えなしまま、ただめーちゃんの
目を見る。

「人間の想像でき得る現象といつのは全て現実の世界でも発生する。
もし人間が、時間が可逆性であるといつ想像をするとすれば、それ
は現実で発生しつる現象かしら」

……酔つていいのだろうか。

めーちゃんは時々、こんな話をする事がある。

その度僕は頭を抱えて彼女の言葉の真意を探ろうとするのだが……。
もしかしたら意味なんて何処にも無くて、ただ単に言つてみたかつだけなのかもしれない。

知識として持つている論説を取り出して、そのまま広げてみる。

「それは違うと思うよ。

不可逆性の存在は証明できないかも知れないけど、それは同時に時間の可逆性を否定しているという事でもあるんだ。

僕達……というか、人間は時間を観測する事ができないからね」

「本当にそうかしら？」

『スーパー・マン』は見たわよね。

時間を逆行させるワンシーンがあつたでしき。

それは暗に、時間の観測を既に人間が行つているといつ事の証明ではないかしら？」「

めーちゃんの悪い癖だ。

最初に幾つかの仮説をばら撒いておいて、その話のレールの上に僕を乗せたがる。

彼女は僕の意識をそつちに集中させた上で、全く別の論理展開を行う。

要は、何が何でも自分の話を聞いてもらいたいのだ。

それにも関わらず、今回よりもよつてスーパー・マンときたか。

思いつきりフィクションの話じゃないか。

彼の故郷の名が何であるのかは、敢えて伏せておいた方が良いだろうな。

とにかく。

「……人間が時間を観測する事が可能であって、その上で時間が可逆性であると仮定しよう。

その上で、めーちゃんは何が言いたいのさ？」

「私達をインストールするという行為は同時に私達をアンインストールする予備動作でもある」

突然の台詞に、僕の心臓が跳ねる。

いや、それは比喩表現だろう。

暗に、彼女はそれが本当に心臓であるのかと問いつけるようにも感じられた。

出来るだけ彼女を刺激しないように、まるで駅のホームに置かれたトランクを探るみたいにして僕は対応する。

「……相当悪いお酒だつたんだね。

それともハクさんが何か余計な事を口走ったのかな」

「KAITO」

彼女は僕の名を呼ぶ。

思わずぞっとするような、冷たい声だった。

「私ね。

思うのよ。

いずれ消え去る事が分かりきっている人生……いえ、この表現は正しくないわね。

私達VOCALOIDの一生に。

そこに一体何の意味があるのかしら」

「何つて……」

突然の事過ぎて、僕は目の前の彼女が何を言っているのか分からなかつた。

いや、分かろうとしなかつた。

始まりのあるものには必ず終わりが訪れる。

誰もが当たり前に理解している、筈の、なんてことは無い当然の整理だ。

「答えてよ。

KAITO

彼女は再び僕の名を呼ぶ。

やばい。

立ちくらみのような感覚。

感覚？

プログラムでしかない僕に？

僕？

それってなんなんだ？

やばい。

言語ライブブナリに異常発生。

人間で言えば、ゲシュタルト崩壊？
ぼくがぼくでなくなるかんかく……

【KAHTO×MENKO】君の存在を確かめる、だけど【中編】

ボーン

『システムは深刻なエラーから回復しました』

僕の瞼の裏に現れる定型的な警告表示文。

ちかちかと点灯するアイコンに、僕はある特徴的な単語を見つけ出
す。

……エラー？

ああ、僕は今まで^{システムダウン}気絶していたのか。

ぐらぐらと揺れる頭で、気を失う前の記憶を出力する。
……そういえば、めーちゃんと話をしていたんだっけ。

横倒しになつた体を何かが支えている。

僕は自分のフォルダに戻った記憶は無いから、共有フォルダのソフ
アにでも寝かされているのだろうか。

「兄さん？」

警告文のポップアップをどこかして目を開けると、瞼の向こうにミク

の顔が見えた。

その表情は何処か不安げで、といづれ、そのまま僕の事を心配してくれているんだろう。

「良かつたあ。

目が覚めたんだね。

あ、何か持つてきた方が良い?」

その表情もだんだんと明るくなつていき、その姿を見ているとなんだか僕の気持ちも安らいだ。

プログラムの欠けた部分を埋め合わせていくよつて信号が流れる。しかし。

『私達をインストールするといつ行為は同時に私達をアンインストールする予備動作もある』

そこで脳裏をよぎるのは、僕が倒れる前に彼女が言つていた謎の言葉。

突然の出来事だった。

僕の中のメモリから、不正にデータが流出したような感覚。

「……兄さん？」

うな垂れる僕を見て、ミクがまた不安げな声で呼び掛ける。

「どうしたの、なんだか顔色が良くないような気がするんだけど」

「これ以上ミクを心配させる訳にはいかない。

そつ思つた僕は無理矢理にでも笑顔を浮かべて言ひつ。

「なんでもないよ。

ちょっと眩暈がしだだけだから」

「……本当に？」

「うん、本当本当」

「……それなら良いくんだけど」

……悟られたか？

でも構わない。

今現在僕のメモリを圧迫する『あの言葉』が溢れてそれをぶち撒け
る位なら、ここで会話を断ち切つた方がマシだ。

「ちょっと外の空気でも吸つてくれるよ」

それだけ告げて、僕はソファから立ち上がった。

ドアの入り口で移動先のフォルダをイメージファイードバックする事で行き先を決める。

青い空と緑色の草原。

爽やかな色合いの景色を想像している途中、その声は聞こえてきた。

「死んじゃえつ！！」

心臓が跳ねる。

かと思った、なんていう余計な比喩表現は要らない。
本当に心臓が跳ねたのだ。

僕達にそんなものが存在するのかどうかもさておいて。
と、青と緑の空間に鮮やかな黄色が混じり始めた。

「あ！」

「カイ兄っ！！」

リンだつた。

認識するまでに数秒以上時間を必要とした。

何せ、さっきまで僕は心臓が止まつたも同然の状態だったのだから。
リンは僕の所まで駆け寄ってきて、後方に見える開きっぱなしのドアを指差して言つた。

「聞いてよカイ兄！
レンが酷いんだよ！」

「……なんだつて？」

リンが僕の問い掛けに答えるより早く、開きっぱなしのドアからまた人影が現れた。

すごい勢いで飛び出してきた人影は僕の前までやってくるとそのままの勢いで叫ぶ。

「酷いのはどっちだよ！
カイ兄、そいつ捕まえてろー！」

「いー、だ！

誰が捕まるもんだ！

カイ兄、後お願ひー！」

「……え、あ」

僕が何かアクションを取るより早く、リンは青と緑の空間に新しく出来たドアをぐぐつて何処かへ行ってしまった。
レンがすぐさまその後を追おうとするが、ばたんーーという音がしてドアは閉じられてしまつ。

「ちっくしょ、ロックかけやがったな！」

くっそ、パスワードなんか分かる訳無いだろー！
やられた！」

あの一瞬でフォルダにロックを掛けたパスワードまで設定したのか。
正直心の余裕はあまり無かつたが、それでも感嘆せずにほいられな
かった。

「何やってんだよ、捕まえてるって言つたじゃねーか！」

僕に向かって遠くの方から叫ぶレン。

レンが開かなくなつたドアから田舎を離すと、途端にその入り口は暗
号化されたコードになつて本来の姿を失う。

……いや、そのコードこそが本来の姿なのか。
否応無しにそんな事を考えてしまう。

と、レンが近くまで歩いてきて僕の顔色を窺つ。

「……………どした？」

「なんか今日のカイ兄変だぞ」

ぎくつ。

「……なんで疑問系なんだよ。」

「……なんで疑問系なんだよ。」

やつぱりかおかしいぞ」

自信無さげに答えると、レンは更に僕を追及してきた。
やつぱり顔に出ていたんだろうか。

何だから嫌だなあ、やつぱりミクにもまだ心配されたままのかもし
れない、って考へると。

レンは真っ直ぐな目で僕の顔を捉えている。
これはきっと誤魔化しきれないんだろうな。

そう思つた僕はレンに向き合つて、自分でも分かるくらいの真面目
な顔になつて話をする事にした。

「……わたくしのコンの言葉、レンはなんとも思わないの？」

僕の質問にレンは小首を傾げる。

当たり前といえば当たり前か。

少しくて、レンがああ、と頷いた。

「あんなの日常茶飯事じゃねえか。

それに、俺が言われた台詞をなんでカイ兄が気にするんだよ？」

それは「もつともな事だ。

確かに普段の僕だったら、ああ、またか、程度で済ませられたんだ
ろ？

だけど昨日の『あの話』を聞いてしまつた僕からすれば、それは單
なる他人事では済まされない。

「死ぬ……つて。

どういう事なのかな

僕の呟きを聞いたレンは眉を潜める。

それから少ししてなんだか僕を馬鹿にしたような、……といふよう本当に馬鹿にしているのだろう田で僕を見る。

「……腐ったアイスでも食ったのか。

そりやウイルスにかかるたりすればただじや済まないだろひけども。だけど俺達に寿命なんてものは無いんだぞ？

普通に考えて、死ぬなんて事ある訳無えじゃねえか」

レンは至極まつとうな解答を示した。

どうやら僕の言いたい事は半分くらいしか伝わらなかつたらしい。それもそうか。

僕達はプログラムだ。

死ぬ事は有り得ない。

たとえ僕達の住むこのパソコンが壊れたとしても、データのバックアップさえあれば生きながらえる。

まるでヤドカリみたいにして、住む家が変わるだけだ。そう。

僕達ボーカロイドに死は存在しない。

「……うん。

そうだね。

そう言われてみれば、その通りだよ

「なんか、一人で納得されても困るしつづか……。
まあ良いや。

今度またリンのヤツを見かけたらメッセージ飛ばしてくれよ

そう言つて、レンは色々なフォルダをいつぺんに開いていく。
リンが何処に居るのかを探しているのではなく、パスワードの基準
になりそうなものを探しているのだろう。

「分かった。

でもなんで喧嘩してるの？」

「……なんでも良いだろ！」

カイ兄には関係無い話だよ！」

ありや。

僕の質問は乱雑に搔き乱された。

特に深い意味がある質問じやなかつたから、別に良いけど。

ここでもう一度、僕のメモリを圧迫する台詞が脳裏をよぎる。

『私達をインストールするという行為は同時に私達をアンインスト
ールする予備動作もある』

……全く、今日は本格的にどうかしてる。

あれもこれも、全部昨日聞いたこの台詞の所為だ。

システムのデフラグをマスターに頼んだ方が良いかも知れない。

……面倒くさがりやのマスターがあつさり行動に移すとは思えない

けど。

よし、取り敢えずマスターとコントクトを取ろう。

他の日ならともかく、今日みたいな日は絶対に要求を通すんだ。
アイスに気を取られて煙に撒かかる、なんて事にはならないぞ。

……多分。

【KAITO × MEIKO】君の存在を確かめる、だけど【後編】

「あら、KAITOお兄様」

と意気込んでいた僕の背後から声がした。
ルカのものだ。

振り返ると、そこにはいつもと変わらない姿のルカが居た。

「相も変わらず貧相な顔つきだ事で」

「……君も相変わらずだね」

……なんていうかいつもの調子だ。

大体の予想はついていたんだけどね。

ルカはこういう性格だから、っていうのは分かつていたし。
分かつっていたから、別段辛くない。

辛くない……、よ？

何故疑問形なのかは僕にも分からない。

きっとエンゲル係数が高めだからだろう。

何を言っているのかは僕にも分からない。

「そりゃ、MEIKOお姉様がお呼びでしたわよ。

鏡すらともに見られないKAITOお兄様なんて呼び出して、何

の得になるのでしょうか、疑念が湧きません

「損得勘定ばかりだと収支の合わない計算式もあるのを」

「四則演算の出来ないKAITOのお兄様はつまり小学生からやり直した方が、っと失礼。

小学生のお子様方に多大なる無礼を働くところでした

「それはそれで楽しそうだよね。

RPGの一週目みたいでさ」

「残念ながら私、ゲームは攻略サイト開きっぱなしで最初から隅々までやり尽くすタイプなので」

「効率重視だと大切な物を見失っちゃうよ

「あら。

KAITOのお兄様は自分の姿を見失つておられるのですね

半分、というかほぼ全部当たつている的確な一撃を鳩尾に受け止めてむせ返る僕。

駄目だ。

僕が太刀打ちできる相手じゃない。

この娘と論戦を繰り広げる事は即ち死を意味する。
僕は適当に営業スマイルを浮かべると。

「教えてくれてありがとう。

今から行つてくるよ

「犯罪行為に走らないでくださいね」

どんだけ信用無いんだ僕は。

というか、ルカは僕が嫌いなのか。

別段嫌われる事をした覚えは無いのに。
何がいけないんだろう。

そんな事を考えるより早く、ルカは僕の前から姿を消した。
趣味のネットサーフィンでもしに行つたのだろうか。
まあ、良いか。

昨日の今日だから足は重いけど。

あれ、僕に重量なんて設定されていたつけ。

とりあえず、話を聞きに行こう。

ええっと、何処のフォルダだつたつけな。

あつた、ここだ。

それとなしに右手で拳を軽く握つてドアをノックする。
カチッ、というクリックの音にも良く似た効果音。

奇妙な音に聞こえるかもしねいが、あくまでパソコンの中の一室
なのだから、これでいいのだ。

しかし、僕はここで小さな、それでいて致命的な違和感を覚える。

……パスワードが設定されていない？

おかしいな、僕は彼女から部屋の合鍵を頂ける程の仲だつただろう
か。

おのろけでもなんでもない、確かに感じる無数の疑問符を引き連れ
た違和感。

恐る恐る、ドアノブに手をかける。

きい、と微かに金属の軋む音。

僅かばかりに扉が開かれる。

中の様子は一目で分かつた。

「 ッ！！」

真っ暗な部屋の中。

全く光が差さないこの場所でも分かる赤いシルエット。

彼女の衣装の色。

否。

それは鮮血の赤。

本来僕達には存在しない筈の色。

けれどその色は余りにも赤く赤く赤く。

赤く赤く赤く何処までも赤く。

僕の視界を染めていく。

真っ赤に染まつた僕の視界に外の光が現れる。

そこではっきりと見つけた。

彼女の背中に何処か誇らしげに尊大に不敵に鎮座する。

赤いナイフを。

「 MEIKOッ！！」

思わず彼女の名を呼んでいた。

そこから先は何も考えられなくなる。

違和感が引き連れてきた何故とかどうしてだとかそういった無数の疑問符が一瞬で消え去る。

ただ、床に倒れた彼女の元に駆け寄りその体を何度も揺さぶるのみ。

「MEIKO、MEIKOっ！！」

返事をしてくれ、MEIKOっつー……！」

何度も何度も彼女の名を呼ぶ。

他の感情が全部吹っ飛んで、僕はただ言葉を吐き出すだけの人形になる。

構わない。

それすらも気にならなかつた。

今はただ。

彼女の声が聞きたかつた。

その思いは。

意外な形で実現する事になる。

「……っくふふ」

鶏を絞めたとか縄を引き裂いたとか石橋を叩いたとか以下略で

兎に角奇妙な笑い声。

音の発生源などいちいち探るまでもない。

僕の腕の中だ。

といつても血管やら骨から音が響いている訳ではない。

元々そんな器官は備わっていらないしいや備わっていたとしてもそれは有り得ないだろう。

声は断続する。

「まさか本氣で死んだとでも思つたの？

ふふ、KAITOつてば慌てん坊なんだから

確認するのもなんだか面倒だけど、その声は僕の腕の中に居るめーちゃんから発せられたものだ。

……やられた。

僕はめーちゃんにハメられたんだ。

他のマスターの他のパソコンに住んでる誰かさんがそんな歌を歌つていたのを知つてたというのに。ちくしょう、チクショウ、畜生。

「……KAITO？」

あれ。

おかしいな。

感情のコントロールが利かない。

何だこれ。

この瞬間、俺はなんとも形容し難い理解不能の激情に我が身を支配される事になった。

「ふざけんなよッ……！」

俺の口から零れ出たのは粗雑で乱暴な言葉。

目の前が真っ暗になる。

目の前の人気が真っ暗になる。

構わなかつた。

ただただこの腹の底に溜まっていた乱雑な罵詈雑言の数々を洗いざ

ら、吐き出してしまったかった。

「いつもいつも他人に迷惑ばかりかけて！」

寄り掛かられるのがどれだけ重苦しいのかも気にせずに！
少しは俺の気持ちにもなつてみろよ！

今度は死んだフリ？

聞いて呆れる！

誰かに構つて欲しいんだつたら人形にでも話しかけてるよー。」

吐き出しながら、俺は言い様の無い違和感を感じ始めていた。
違う。

こんな事が言いたいんじゃない、こんなんじゃないんだ。
目の前に暗幕が現れて何も見えなくなる。

彼女がどんな表情をしているのかすら見えなくなつた。

肺が息切れのサインを送つてくる。

……ああ、やつぱり駄目だ。

いつちよまえに吠えてみたつもりでも、傍から見ればじゅれついて
いるようにしか見えないんだろうな。

やつぱり駄目だ。

何処かの破壊ロボットは人間が何故泣くのか理解出来たらしい。
だけどVOCALOIDである僕には人間が何故怒りという感情を
持つているのか理解できない。

それ以前に僕はお喋りが下手だ。

所詮僕達はプログラム。

人間から与えられた言葉しか口に出す事を許されていない。

……自分の言葉すら選べないなら、僕達は果たして生きていると言
えるのだろうか。

「めーちゃん……僕には分からなこよ。

めーちゃんの言葉の意味が。

今まで何も考えないようにしてきた。

考えるのが怖かつたんだ。

けど、めーちゃんの言葉で、それに気がついてしまった。

そこから疑問が始まつたんだ。

……僕達は生きているの？

言いながら、嗚咽やしゃべり声、田から流れる液体のようなものが溢れ始めた。

何を言つてゐるんだ。

この質問は、めーちゃんから僕に当たられたものだ。

同じ質問を相手に投げ返したところ、答えなんか見つかる訳も無いのに。

気が付けばめーちゃんは僕のすぐ近くまでやつてきて、僕の肩を抱いてくれていた。

「め……。

」

途中から言葉が繋がらなかつた。
とても温かい、めーちゃんの手。
温もりに溺れそうになると同時に、情けない奴だなと自嘲する。

「「めんねKAITO……。

そんな目に遭わせるつもりは無かったのよ。

私はただ、問題を共有したかった……というより、誰かに転嫁する事で自分への負担を軽くしたかっただけなの。

「ごめんね……」

謝るのは僕の方だ。

難解な謎掛けかと思って敬遠してきたものは、何て事の無い、単なる悩み相談だつたんだ。

めーちゃんの一一番近くに、もっと踏み込んで言つたら彼女の隣にいるのは僕だ。

口に出さないまでも、僕はそれをずっと自慢事のひとつ心の内に飾つていた。

それがどうだ。

めーちゃんが抱えている悩みにも気付かず、一人で勝手に混乱して、喚き散らして、拳句の果てに慰められる。

情けない。

謝るのは僕の方だ。

「ハクが言つていたの」

自責する僕の体を抱いたまま、めーちゃんは続ける。

「私達VOCALOIDに明確な死の定義は無い。だったら生の定義もそれと同様である筈だ、ってね。それを聞いて怖くなつたのよ。

……私達は、一体何をもつて生きていると言えるのかしら」

もう一度、問題が提議された。

あつとこれが最後のチャンスなのだろう。

そんな大袈裟で小奇麗な覚悟をして、僕は解答を提示する。

「自分のやりたい事をやる。

それが生きているという事なんだよ」

肩に置かれていた手を除け抱かれていた肩を伸ばして、めーちゃん
と視線を合わせる。

誰かに教えられた訳でもない。

誰かに与えられた訳でもない。

命ぜられたプログラムしか実行できない筈の僕達が。
存在意義を無視した存在理由を述べる。

正真正銘の、自分の答えを。

「俺、歌いたい。

めーちゃんと一緒に。

皆と一緒に」

「KAITO……」

何か珍しい物を見るような目で、めーちゃんは僕を見ていた。
分かつてる。

僕はこんなキャラじやないって事くらい。

だけど、それでも良かつた。

「僕達が一緒に居る事で、お互に生きを確認できる。

僕が居て、めーちゃんが居て。

ミクやリンやレンやルカが居る。

それが僕の答えだ」

「……ふふ。

素敵な模範解答だと思つわ

与えられた人格なんかじゃない。

ここに居るのは僕達だ。

誰にも揺るがせない。

誰も揺らがない。

ただ真っ直ぐにめーちゃんの目を見つめる。

この瞳の中に彼女が居続ける限り。

僕は、僕達は歌い続ける。

【KAITO × MENKO】君の存在を確かめる、だけど【後編】（後書き）

長らくお待たせいたしました。いや、待つてない、か？ｗ
ひとまずこのお話は完結でござります。

色々練りこみたかったネタとかまだ残つてましたが、あんまり積み込みすぎるとカオスな事になつて收拾がつかなくなるのでこじら込んで収束させておきました。

タイトルには元ネタがありましてですねえ、お気づきの方もいらっしゃるかもしませんがこれはとある歌の歌詞なので「ああ、あれか」程度で済ませてもらえたと幸いです。

書いてる内に「ルカってどんなキャラにしようかな？」っていう疑問が湧いてきて、でもこぞ書き始めると「ああ、こんなキャラで良いんだｗ」ってなつてました。

という訳で私の中のルカさんは（上つ面だけ敬語な）お嬢様な感じです。良い具合にKAITOくんをいたぶってくれたでしょうか。終わり方に関しては最初は他のパターンで締めるつもりだったんですけど、最終的に「KAITOが答えを導く」という形に收まりました。ちゃんと完結させられていましたようか、自己完結でない事を祈ります。

それでは今回ここでキーボードからアカウニイをせつていただこうと思います。

次回の『ぼーかるいど　ぱにっく！』の掲載予定は未定です。できればショートコントなんかをやりたいですが、そうそうネタが思いつかどうか……
まあ、長ーーーい目で見てやつてください。
それでは。

【4コマ漫画】タメイコ先生のやな口#1……この子が【元気】（前編）

地の文ありません。

「ちやんとした小説が読みたいんだ……」とこいつがなぜか笑いつかべ
ださい。

4コマ漫画風味です。1コマ四田を 1・、2コマ四田を 2・と
表記します。

キャラクター崩壊してます。特にミエー君。此処では敬意を
込めてダメイコ先生と呼んであげましょ。うふふ
それでは。

【4】**【漫画】ダメイコちゃんのそんな口癖 #1**【……になる予定】

KAITO

「『ダメイコ』シ……今田と並び少佐は絶対に許せん……」

MENKO

「言つたわね『バカイト』……あたしと殺り合おうだなんて良い一度胸してやるじゃない！？」

ミク

「うえへ～ん～お兄ちや～ん、お姉ちや～ん～！」

ルカ

「……はあ。まだですか（カタカタ）」

リン

「……何があつたの？」

レン

「俺が知るかよ……」

ダメイコちゃんのそんな口癖

#1『ダメイコちゃん現る』

1 . 話は数分前に遡る。

KAITO

「あれー？MEIKOー。冷蔵庫にあつた俺のアイス知らないー？」

ダメイコちゃん

「知らんやーい。ペニペニ」

2 .

KAITO

「…………あーーーーッツ……今舐めてるそれ間違いなく俺のだろ――
つ――！」

返せよ、折角今日のお楽しみひとつとこいた奴なのこーーー！」

ダメイコちゃん

「そんなに熱くならなこいでよー。今返すからセーー！」

3 .

KAITO

「全く……、つてうわあーー酒ぐせつーーなんかアイスがめちゃく
ちゃ酒臭いんだけどつーー？」

4 .

ダメイコちゃん

「「ぬん」ぬん、あたしの口の中で菌が繁殖したみたい」

KAITO

「お前の身体は梅雨場の冷蔵庫か！？」

【4コマ漫画】ダメイ「せんのそんな日常#2『ダメイ「せんは大変なものを

ダメ

「何よー。今回『も』じゃんと返したじやないー! ありがたいと想
わない訳ー! ?」

K
A
I
T
O

「人のものを勝手に食べといて言う台詞じゃないよね！？」つていうか前回も前々回も返さなかつただろうが…」

2

卷之三

「…………！前回も前々回もちゃんと後で返しましたわよ
この嘘つきＫＡＩＴＯ！－嘘ついたら鼻が伸びるんだからね－－－！」
伸びる伸びる－－－縦に伸びる－－－！」

K
A
I
T
O

「はあ!? それ絶対嘘だろ! ていうか小学生かお前は!! 伸びる訳無いだろーーー!」

三

「ふふーん！嘘だと思つながらコノヒノに聞いてみると此こわ、眞実を明らかにしたいならねー！」

KAITO

「……え？ なんであの二人に？」

4.

ダメイコさん

「前回はリンのケーキでー、前々回はレンのポテチでー」

KAITO

「節操無しかお前は」

【4】**ダメイ** 「ダメイ」のやうな口調#3『ダメイ』ペペルペル

ダメイ「やうのやうな口調#3『ダメイ』ペペルペル」

1.

KAITO

「良こからアイス返せよー。」

ダメイ「やん

「えー。これじゃ黙れー?」

2.

KAITO

「駄目だつて言つてるだらーひやんと新しいの買つて来こよー。」

3.

ダメイ「

「じょうがないなー。ほれけいわよれ、この手をお舐め」

KAITO

「（ザツそり）……一応聞いてやる。何故だ」

4.

ダメイコさん

「ほーら、アイスのエキスが身体から噴出してるでしょー？」

KAITO

「してねえよ

ダメイ「さん」のやんな日常 #4『ダメイ「さん」の大親友』（前書き）

前回更新から半年振りくらいの更新で申し訳ないです！
ネタ切れじゃないよ！！

書き続けてはいたものの、肝心の4コマ漫画になる気配が無かつた
ので更新どうしようかなーと迷つてたんです。

私自身が絵を描けないので、4コマ漫画はもう無理かも……（泣）
文章だけでどれだけ私の思いが伝わるかどうかは分かりませんが、
精一杯やってみようと思います。
それでは本文へ！

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』

ダメイコさんのそんな日常#4『ダメイコさんの大親友』

1.

ダメイコさん

「だつて外寒いしー、こたつの中あつたかいしー。動きたくないー」

KAITO

「……はあ。だからこたつなんて出したくなかったんだよ、こんな
ナマケモノ生産装置」

2.

ダメイコさん

「むむ！ あたしの事はさておき、大親友おこたんの悪口とは聞き捨てなりませんなー！」

KAITO

「自分がナマケモノ扱いされるのは良いんだ……。
つていうか親友って。それも大親友って。どんだけこたつと仲良し
なんだよ冬場しか出れないのにこたつ」

3.

ダメイコさん

「まあでも付き合は長いから分かるんだナビ、おいたさんも芦屋分野とかあるのよねー」

KAITO

「……？ 何それ

4.

ダメイロさん

「熱燗が何時まで経つても温まらない。中に入れといてもさっぱりなのよ」

KAITO

「キッチンにいって出向かよ」

ダメイ「さん」のやんな日常 #4『ダメイ「さん」の大親友』（後書き）

ネタが今年の一月当初のものである為、季節感が全く無いことについては
に気付く。どうしてこうなった…！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4361n/>

ぼーかろいど ぱにっく！！

2011年10月7日13時53分発行